

SRID NEWSLETTER

No. 323 OCTOBER 2002 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎
〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

10月号

自己紹介

遙か Mozambique からの
ネパールの黒百合

原 優治さん

福永 喜朋さん

有原 元博さん

お知らせ

1) 休会 齋藤 崇沖 さん 退会 齋藤 優 さん

2) 懇談会 10月31日(火) FASID 第二研修室

講師 J B I C 前ジャカルタ首席駐在員

栢山信夫氏 (ハゼヤマ・ノブオ。10月21日に帰国予定)

テーマ: J B I C の現地の視点から見たインドネシアの地方分権化の

進捗状況と問題点 (仮題)

3) 幹事会 11月12日(火) FASID 第二研修室

自己紹介

マネージメントソフトテクノロジー (MST) 研究所代表
及び明星大学経済学部兼任講師 原 優治

はじめまして、原優治と申します。熱心な事務局の三上さんからのたっのご指名ですので、はずかしながら筆をとらせていただきます。

まず履歴書風に述べますと、1946年大分県生れ。東京都大田区久が原在住。一橋大学経済学部大学院(修士)終了。信越化学工業、産能大学、ケプナートリゴ(日本)、住友

ビジネスコンサルティングを経て独立。現在、マネージメントソフトテクノロジー（MS T）研究所代表パートナー・チーフコンサルタント及び明星大学経済学部兼任講師を勤めています。

このような流れで現在、経営コンサルティングと経営教育を主たる仕事にしております。最近では、中小企業との関係が多くなり、企業と顧問契約を結んだ上で経営相談や教育研修をさせていただいております。また、上記の通り、この4月から大学へ週2回通って、経営学とトップマネジメント論の講義をしております。若い人達に接しているとフレッシュな学びの原点へ立ち返る気分がして身のひきしまる思いです。レクチャアの後では、はたしてうまくわかるように説明できたか、できなかったかなどとても気にしています。こんなことから、講義の組み立て方、わかり易いことばの選択、板書の工夫、ちょっとしたボディランゲージによる表現などなるべく予行演習をしたうえで本番のレクチャアに臨むようにしています。まさに **Teaching is Learning** であることが実感としてわかるこのごろです。

本職をはなれて自分なりに力を入れている研究は以下の通りです。

- 1) 会計学の分野では、付加価値会計を社会会計（マクロ）、企業会計（ミクロ）双方へ制度会計として導入させ、国民経済計算と事業主体別個別経済計算を結びつけ連関できるように主張しています。
- 2) 日本経済論の分野では、バブルの崩壊の後、とくに富（ストック）と所得（フロー）の階層別構成に極度の歪みが生じており、これが個人消費における平均及び限界消費性向へ大きな影響をあたえてしまって、デフレギャップの一つの大きな要因となっていることに注目しています。いわゆる“構造改革”は、このようなことを考慮して“世直し”的な抜本的なメスをいれなければならないと考え、いくつかの富と所得の再分配のための処方箋を用意していますが、発表までには今すこし理論研究と実証検分を深めなければならないと考えています。
- 3) 哲学的側面からの仏教思想の研究です。（私は基本的には仏教徒とっておりますので、そのまま信仰へ繋がっていくかもしれませんが・・・）
- 4) 原初のキリスト教の探索（共観福音書によるイエス・キリストの言動にはたいへん心を打たれていますので、もっと真実を知りたい。）また、パウロらによる世界宗教としての「キリスト教」の成立史研究。（なんといっても今のグローバリゼーションの精神的バックボーンはキリスト教ですから、その意味からももっと理解したい。）
- 5) 郷土史としての戦国時代の太田・島津両氏のせめぎ合いの歴史的・地政学的調査・研究。
- 6) 日本が太平洋戦争へ突入するに至った様々な事情や要因の究明。このため1930年代からの社会・経済・および政治プロセスをたどるとともに当時の言論界の底流にあった精神・思想のありさまを調べています。

さて、私は学生時代から専攻分野をあまり早くから狭く限定しないで、隣接する学科の勉強も十分にやり込んでトータルなアプローチをしなければならないと考えてきました。また研究者一筋に実社会へは出ないで研究室へ籠る生き方も指導教官に薦められましたが、敢えて断って企業へ、次にはコンサルティングファームへと就職して行きました。これは、実社会の汗と涙を流してはたらく実感がわからずに経済学のほんとうのレクチャアはできないはずだと思い込んだからでした。今にして考えると半分は当り、半分は当たっていません。かようなにも感じられます。ともあれ私の本職としての専攻分野は、能力開発・組織開発論、戦略経営論、リーダーシップ論、意思決定過程論などへ絞られてきています。

この夏3つの論文を汗をふきふき執筆しましたが、その中の2つ、「グローバリゼーションの進むなか企業における国際的人材育成の新潮流」(明星大学紀要)と「理念実現をめざす企業と自己実現をめざす個人が融合する場としてのスモールビジネスチームへのリーダーシップについて」(富士大学紀要)へは特に力を入れて書き上げました。章別構成について申しますと、次ぎのようになっています。(希望の方には差し上げますので遠慮なくその旨事務局を通しておっしゃってください。)

前者論文：

- 1) ヒューマンリソースマネジメント (HRM) からみた基底的ないくつかの問題とその解決のための視覚と方法について。
- 2) 異文化コミュニケーションと経営人材の現地化について。
- 3) 国際的人材育成のための新しい教育プログラムの潮流。

後者論文：

- 1) 実際のスモールビジネスチーム (SBT) を活かした経営の現実状況と問題点。
- 2) 個人と企業の進化からみてめざすべき両者の自己実現と融合のレベルと、それを阻む要因の改善、もしくは排除に関するリーダーシップについて。
- 3) 個人と企業の自己実現および融合の仕掛けとしてのスモールビジネスチームの組織的位置づけと運営をめぐるトップと SBT リーダーのリーダーシップについて。
- 4) 個人—SBT—企業のトライアングル構造における相互働きかけとその基幹的な場としてのコンフロンテーションミーティング等の設営について。
- 5) おわりに(残された今後の問題)。

前者の論文においては異文化コミュニケーションを扱った章で、コンテンツとコンテキストの成分比重が日本と欧米では違うことと、そのことに気づき対応していくことを強調しております。(ここでコンテンツとは言葉そのものの表現性、論理性をさしてあり、コンテキストとは言葉の発せられる背景、いきさつ、雰囲気などをさしています。) 日本は低コ

ンテンツ、高コンテキストであり、欧米はその逆をいうわけです。私はさっそく 9 月の某企業におけるコミュニケーションをテーマとする教育研修で実習をまじえた形で、実際に使ってみたところかなり良い成果を得ることができました。

さて、秋も深まってきて同窓会の季節です。私は九州の大分県の佐伯に生れ育ち、地元の高校を出て、18 歳のときはじめて上京、以来これまで東京を中心に生活してきました。最近、在京の田舎の中学、高校の同窓会の招きをうけると喜んで駆けつけ、にぎやかにみんなで騒いで、そしてなつかしく郷里のことを思い出しています。みなさんはいかがですか。それにしても恩師の訃報に接することが多くなり、本当に辛くさみしい限りです。

このような次第で、歳をとってきて時々、世の無常を感じつつも、まだまだ発展途上人と自己を位置づけ、なんとか驚馬に鞭打ってがんばっております。これからも SRID のメンバーとしてはずかしくないよう努力して参りたいと思いますので今後ともよろしくお付き合いのほどお願いいたします。

遙か Mozambique からのお便り

福永 喜朋

5 月 8 日,Papua Newguinea より帰国し、一休みしましたが、日本の ODA 無償案件 Africa,Mozambique 北方の Mocuba City を中心に Mar.31,2004 迄に 141 本(100m depth) の井戸堀と Hand Pump を設置する Project の為、May 30,2002 より PCI ,Resident Engineer として Mocuba City に赴任しています。小生にとって 50 番目の訪問国です。

ここは、南緯 17 度、標高 350m で首都 Maputo より、1,200km の距離にあり、治安も比較的良く安心してあります。約 45 坪のコンクリート造平屋建に一人で住んでいますが天井が 3.25m と高く落ちてきません。電圧変動も大きくて 220V から 150V 迄下がる為、蛍光灯が消えてしまうことがしばしばです。現地通貨はメティカイスと呼ばれますが、1,000 メティカイスが何と日本円で約 5 円の為、サイフだけでは役に立たず、カバンの中にも札束を常に入れておく必要があります。1975 年独立迄はポルトガルの植民地として栄えましたが、独立後ロシアの共産化及び内戦が約 20 年まかり通り、国土は荒廃し、民意も低下しました。国土は 900,000km² と日本の 2.4 倍もありますが、人口は 1,700 万人と少なく伸び悩んでいます。足踏み式ミシン(中国製)が店先に目白押しに並んでいて、客が縫い物を依頼しており、日本の 50 年前位を連想します。又、自転車が 1 台 6,000 円もするのに皆が乗っています。

PapuaNewguinea では殆ど見られない光景でその意味では Mozambique の方が裕福と言えます。但し、半分の住民が裸足で、Papua Newguinea と変りありません。約 120km 南方の Quelimane City に時々買い物に出かけ、中国人経営の店で日本の醤油を買って、なんとか日本料理を楽しんだりしています。現在こちらは真冬ですが日中気温は 32 度も

あり、2月が思いやられます。交信状況が悪く、こちらからは電話のみが可能で Fax は不可です。こちらからは電話、Fax 共、不可の様です。郵便配達システムも機能しておらず、日本からの手紙(航空便)が 53 日もかかってようやく届く始末です。

こちらの住所、電話、Fax は下記です。

宛名 : Y.Fukunaga c/o PCI Mocuba Site Office

住所 : P.O.Box 106 Mocuba Zambezia, Mozambique

Tel & Fax : 258-4-810464

[E-mail : fukunagay@pcitokyo.co.jp](mailto:fukunagay@pcitokyo.co.jp)

ネパールの黒百合

ハーバード大学植物学教授・ネパールムスタン地域開発協力会顧問 有原 元博

ロックフェラー財団の援助をうけて、学生 40 名が 4 月 24 日(水)、関西空港に集合したが、ネパール共産党マオイストグループのゼネストで出発を 1 週間延期せざるをえなくなり、5 月 1 日にカトマンズに着き、その日のうちにポカラへ移動した。ムスタン郡はアンナプルナヒマールとダウラギリヒマールにはさまれたチベット国境に位置し、郡都はジョムソンである。翌日天候は快晴、多量の荷物を積み込んで、小型飛行機でジョムソン空港へ降り立つことができた。標高 2,600 メートル

ここからは馬とヤクに荷物を積んで、カリガンダキ河に沿って細い道を登ってゆかねばならない。標高 3,600 メートルのテニ村にベースキャンプを張り、植物調査を開始した。

私の学生に対する教育方針は、まずフィールドでの経験を積み、各自興味のあるテーマを発見した上で本や図書館で勉強するという方針であるので、亜高山帯の植生、コケ類、シダ類、キノコ類、高山植物などの標本作成の他、土壌調査も実施した。お世話になった日本の NGO・ネパールムスタン地域開発協力会はテニ村の農場で果樹・野菜・花等の実験栽培を行っている他、米の収穫にも 2 年前から成功しており、世界最高地域栽培記録だそうで、収穫した米は毎年一校ずつ建設している小学校の給食に提供されている。調査は 2 ヶ月半に及んだが、一週間、ヒンズー教とチベット仏教のメッカ、ムクチナート寺院へのトレッキングを実施した他、トゥクチェピーク (6,900 メートル) のイースト峰 (4,800 メートル) にも学生 4 人とともに登頂できたのは良い思い出となった。毎日肉なしのジャガイモカレーにナンの生活で食生活には少し困ったが、カールに咲く黒百合が苦勞をいたわってくれた山旅であった。